

# 砂漠に植林 緑よみがえれ

## 中国・内モンゴル自治区



砂漠に木を植える日本人ボランティア  
中国・内モンゴル自治区ホルチン砂漠で

中国・内モンゴル自治区のホルチン砂漠で、日本の非営利組織（NPO）が8年前に始めた植林が、地元の農牧民に広がっている。砂漠化によって、住民が居住地を迫られるだけでなく、黄砂が巻き上がり日本や韓国に被害を与えている。多くの日本人ボランティアが現地で活動しており、今年の夏には、県内から大学生と高校生の2人が植林に参加した。（久土地亮）

北京の北東約5000キロ。約5000万平方メートルあるホルチン砂漠の年間降雨量は約350ミリ、名古屋市の1560ミリの4分の1以下だ。だが、数百年前は草原で、草が腰の高さまで伸びていたという。

砂漠化は60年代に始まった。人口増加に伴う過剰な放牧や樹木の伐採、開墾などが原因だ。自治区通遼市ウルスン鎮（鎮は町にあたる行政単位）の指導者、包金山書記は「ウルスン鎮西部だけでも、92年に2万頭だったヤギが95年には5万頭に増えた」と話す。干ばつも重なり、迫り来る砂丘から逃れるため、集



## 県内からも参加 学生の日本NPOが活躍

落こと移住せざるを得ない例もあつたという。

NPO法人「沙漠植林ボランティア協会」（本部・岩手県）は94年、ウルスン鎮政府と、砂漠化した約3500坪の土地を無償で借り、20年間で緑化する契約を結んだ。

植林はまず土地を金網で囲って、苗木を食べる家畜の侵入を防ぐ。地下水をポンプでくみ上げ、昨年までに約50万本のポプラや松などを植えた。

こうした土地は「森林農場」として、農牧民に割り振られた。今では防風林や防砂林に育ち、木々の間でトウモロコシや豆などが収穫できる。1戸あたり約5千元（7万5千元）だった農牧民の年収は、約1千元増えたという。現在、同協会が

植林を進める森林農場は6カ所計約2万坪ある。数百人の日本人が、毎年、植林を手伝いに訪れる。今年8月には、小牧市の高校2年、波多野奈

津子さんと名古屋大2年、隅田千恵さんが、環境NGO（非政府組織）「FoE Japan」

のボランティア隊の一員としてやって来た。4泊の植林活動で、砂漠化の現状を学んだ。

波多野さんは授業で砂漠化の問題を知り、実際に見たくて参加した。一人の力では砂漠化は止められないと思っていたが、少しずつでも植林すれば緑化できるのでは、厳しい環境では期待通りには育たず、01年まで3年間続いた干ばつでは、森林農場などに植えた約450万本の木が枯れた。だが、同協会の菊地豊会長は「ホルチン砂漠では、砂漠化の悪循環を止められるとが立って来た」と話す。

同自治区政府は、04年から、放牧を全面禁止する。同自治区の人口の16%を占めるモンゴル族は、遊牧民の生活を、大きく変えることになる。

同自治区政府は、04年から、放牧を全面禁止する。同自治区の人口の16%を占めるモンゴル族は、遊牧民の生活を、大きく変えることになる。